

老年看護学教育にライフヒストリー・インタビューを とりいれた学習成果

尾崎 章子, 齋藤 美華, 東海林志保

東北大学大学院医学系研究科 老年・在宅看護学分野

Effects of Listening Perceived Life History to the Elderly on Nursing Students

Akiko OZAKI, Mika SAITO and Shiho TOUKAIRIN

Division of Gerontological and Home Healthcare Nursing, Health Sciences, Tohoku University Graduate School of Medicine

Key words : Life History, The Elderly, Gerontological Nursing, Nursing Students

The purpose of the present study was to elucidate the learning outcome of students who listened perceived life history to the elderly.

Subjects were 57 nursing students at second grade who listened the life history to their grandfather and/or grandmother. Qualitative inductive analysis was performed using the students' interview reports.

The following three categories were identified as the learning outcome of listening perceived life history to the elderly: "understand the elderly as the people who should be respected", "notice the importance of understanding the meaning of life and experience among the elderly", and "speculate about the issues in gerontological nursing".

The results suggested that life history interview promote the deep understanding to the elderly among nursing students.

はじめに

急速な少子高齢化の進展に伴い、日本の高齢化率は2040年には約36%に達すると推計されている¹⁾。老年看護では、高齢者が積み重ねてきた経験や価値観、文化に基づき、豊かな人生の統合への志向を支援²⁾する視座が求められる。高齢者に対する看護の質は、看護する者が高齢者をどのようにとらえているかによって影響を受ける³⁾ことが指摘されている。

3セメスター（2年次春学期）に開講される必修科目「老年看護学原論」では、老年看護の対象

である高齢者の理解に重きを置いている。老いとは何かを身体的・心理的・社会的側面から考察し、高齢者を総合的かつ全人的にとらえる必要性について理解することを目標にしている。

しかし、若者にとって老いの経験は未知のものである。看護学生を対象とした高齢者に関する印象調査では、看護学生は高齢者に対してネガティブなイメージを持つ者が多い⁴⁾こと、高学年の学生の方が低学年に比べ、高齢者の心理状況や社会生活に対する適応性に関して否定的な認知を持っている⁵⁾という報告がある。老年看護学実習では高齢患者や要介護高齢者にかかわるが、高齢者と

の交流経験が乏しい学生では、実習において障害を持つ高齢者に出会うとそのイメージが強く印象化され、高齢者の特徴を誇張して一般化し、否定的な老人観が強くなる傾向にある⁵⁾と指摘されている。こうした状況を踏まえ、老年看護学教育では、高齢者の現在を断片的局面ではなく、過去との関係を通じた時間的連続性においてとらえ、高齢者の豊かさや能力の積極的な面に関する気づきを促す必要がある。病気や障害を持ってからではなく、元気な時や若い時の高齢者を知ることは、高齢者に対する多面的理解を促進し、高齢者に関心を寄せ、個別性と多様性を尊重する姿勢を培うことにつながると考えられる。

ライフストーリー（生活史）は、個人の人生や出来事を伝記的に編集して記録したもの⁶⁾であるとされる。ここでは「個人が歩んできた自分の人生についての個人の語るストーリー」と定義した。高齢者へのライフストーリーの傾聴は、高齢者理解に効果的なアプローチであるとして、看護や介護を学ぶ学生にライフストーリー・インタビューを組み入れた様々な教育方法^{2,7-11)}が模索されている。そこで、本学でも今年度より、学生に身近な高齢者（主に彼らの祖父母）のライフストーリーを傾聴することを課題として導入した。本研究では、祖父母など身近な高齢者に過去から現在までの体験や生活の歴史を時間軸に沿って語ってもらうライフストーリー・インタビューが、高齢者の生き方や心情を知ることを通して、学生の高齢者に対する理解にどのような効果をもたらすのかを明らかにし、今後の老年看護学の授業展開に関する示唆を得ることを目的とした。

研究方法

1. ライフストーリー・インタビュー実施の概要

ライフストーリー・インタビューは科目「老年看護学原論」で行った（表1）。老いや老化に関する講義（「老いとは何か」）が終了した後と、全ての単元を終えた後の計2回分の授業時間を用いて、祖父母またはそれに準じる身近な高齢者にインタビューを行い、考察する「高齢者のライフヒ

表1. 老年看護学の授業内容

第1回	（講義）	老いとは何か（1）
第2回	（講義）	老いとは何か（2）
第3回	（演習）	高齢者のライフストーリーを描く（1）
第4回	（講義）	高齢者の人権と倫理および性に関する問題 高齢者と家族およびソーシャルサポートシステム 高齢者の終末期ケア
第5回	（講義）	高齢期におけるヘルスプロモーションと高齢者を支える地域づくり
第6回	（講義）	高齢者をとりまく社会、老年看護の理念と目標
第7回	（演習）	高齢者のライフストーリーを描く（2）

ストーリー（生活史）を描く」という課題を課した。課題学習の目的を次のように説明した。① 高齢者の長く生きてきた道に想いをはせ、高齢者の生活世界、高齢者を取り巻く社会や文化の諸相を理解する、② 高齢者が多様な経験や背景を持つ個人であることを理解し、看護実践において、高齢者がこれまで培ってきた価値観や個性を尊重する態度を養う。ライフストーリーの作成は、誕生から現在に至るまでの生活や出来事を聴取し、時系列に整理させた。ライフストーリーの作成を通して、上記の学習目標①②に基づいて考察を記述させた。

2. 対象

対象は、平成27年度に老年看護学原論を受講したA大学看護学2年次学生71名のうち、研究に同意が得られた57名（男子学生1名、女子学生56名）である。看護専門科目は基礎看護学が修了している。

3. 分析方法

レポートの考察の記述をデータとして用いた。考察を精読し、学生が高齢者をどのように捉えているか、看護専門職としての態度やあり方など、学生の学びに相当する文章を抽出した。次に、学生が記載した内容を損なわないように注意しながらコード化した。さらに、類似のコードを分類・整理し、質的帰納的分析の手法を用いて分析した。分析内容は共同研究者間で合意が得られるまで繰

り返し検討し、信頼性、妥当性を確保した。データ分析にあたっては、高齢者個人が特定できないよう配慮した。

4. 倫理的配慮

本研究は、東北大学大学院医学系研究科倫理委員会の審査・承認を得て実施した。提出されたレポートについて成績評価を行った後、後日、改めて研究協力について説明の機会を設けた。本研究の趣旨、研究協力の自由、成績評価は既に終了しており協力の可否による不利益はないこと、レポートの一部である考察の内容を研究データとして使用すること、プライバシーを保護すること、情報は研究以外の目的で使用しないことを口頭と文書で説明し、同意書を回収ボックスに投入してもらい同意を得た。

結 果

1. 対象者の背景

高齢者と同居した経験がある者は26名(45.6%)で、平均同居期間は13年9か月(1か月-19年10か月)であった。同居の有無に関係なく、日頃、高齢者とよく会話する学生は17名(29.8%)であった。高齢者に対するボランティア活動経験がある者は12名で、介護施設でのレクリエーション活動が多かった。インタビューの対象となった高齢者は、祖父または祖母が52名、伯父2名、親戚・知人3名であった。

2. ライフヒストリー・インタビューを通じた学生の学びの内容(表2)

ライフヒストリー・インタビューを通じた学生の学びに関する記述総数は330であった。その内容は、表2に示す通り、『高齢者の理解と敬うべき対象としての実感』127記述、『高齢者の人生と経験の意味を理解することの重要性』102記述、『高齢者看護のあり方に関する抱負』101記述であった。なお、カテゴリーを『』、サブカテゴリーを<>で示す。

1) 高齢者の理解と敬うべき対象としての実感

『高齢者の理解と敬うべき対象としての実感』には5つの内容が含まれ、最も記載が多かったのは、戦争や病気、様々な苦労を経てきた祖父母に

対して<厳しい時代を生き抜いてきたことへの敬意>であった。次いで、ライフヒストリー・インタビューを行ったことで<祖父母の理解による高齢者に対する興味・関心の高まり>、高齢者それぞれが様々な人生背景をもって今を生きているなど<長い人生を歩んだ一人の人として捉えること>があげられた。また、ライフヒストリー・インタビューを通して祖父母から改めて話を聞いたことで<祖父母や家族とのつながりの再確認>をするとともに、自身の父母や祖父母が高齢者であることを改めて認識するなど<高齢者としての祖父母の理解>の記載がみられた。

2) 高齢者の人生と経験の意味を理解することの重要性

『高齢者の人生と経験の意味を理解することの重要性』には5つの内容が含まれ、最も記載が多かったのは、高齢者のこれまでの人生の中での経験が高齢者の考え方や言動、行動などに影響を及ぼすなど<高齢者の人生観や価値観形成の理解の重要性>であった。次いで、高齢者一人ひとりが時間的連続性の中で培ってきた<高齢者の個性や多様性の理解の重要性>、<高齢者が体験した歴史や社会を理解することの重要性>があげられた。また、高齢者を病気になってからだけではなく、元気な頃の高齢者を知るなど<高齢者を多面的に捉えること>の重要性>があげられた。さらに、高齢者は経験が豊富であり、知恵や洞察力などがより優れているなど老化に関する知識と理解をもつことが高齢者を尊重した看護を行う上で必要であるなど<老化に関する知識と理解の重要性>の記載がみられた。

3) 高齢者看護のあり方に関する抱負

『高齢者看護のあり方に関する抱負』には5つの内容が含まれ、最も記載が多かったのは、高齢者が生きてきた人生について価値観や考え方を尊重して看護するなど<高齢者の価値観や個性を理解し、尊重する姿勢で関わること>の重要性>であった。次いで、高齢者が生活する上で人との繋がりが大切であるとする<家族のサポートや地域のつながりをみていくこと>の重要性>および、高齢者の趣味や高齢者自身が打ち込める何かをもて

表2. ライフヒストリー・インタビューを通じた学生の学びの内容

(記述総数 330, 学生 57 人)

カテゴリー (記述数)	サブカテゴリー (記述数)	記述例
I. 高齢者の理解と敬うべき対象としての実感 (127)	① 厳しい時代を生き抜いてきたことへの敬意 (40)	・ 厳しい戦争の時代を生き抜いてきた人々の強さ・精神力は計り知れず、そのような高齢者を敬うことが、私たちにできる最善のことである ・ 祖母は様々な病気を乗り越えていたり、幼少期に戦争を経験したり、苦勞をたくさんしてきたことを実感した
	② 祖父母の理解による高齢者に対する興味・関心の高まり (36)	・ 祖母と会話を重ね、多くのことを学び取っていきたい ・ その人の人生に興味を持たないと、その人のことを理解することができない
	③ 長い人生を歩んだ一人の人として捉えること (27)	・ 高齢者になるまでに、一人一人様々なプロセスを経てきたということを念頭におく必要がある ・ 一人一人が、それぞれの人生背景をもち、今を生きている人間である
	④ 祖父母や家族とのつながりの再確認 (18)	・ 祖父が学びえた教訓は私の教訓である ・ 今回、話を聞くことで祖父が想像以上に私たち孫のことを大切に考えていることを実感した
	⑤ 高齢者としての祖父母の理解 (6)	・ ライフヒストリーの作成を通して祖母が一般的に高齢者と呼ばれる年齢であることに気付いた ・ 幼い頃から過ごしてきた祖母の人生を聞くのは初めてであり、高齢者として理解するための貴重な機会となった
II. 高齢者の人生と経験の意味を理解することの重要性 (102)	① 高齢者の人生観や価値観形成の理解の重要性 (46)	・ 人生の中で経験が、その人の考え方やモットーを形作り、行動にも影響している ・ 高齢者の考え方や言動の背景に注目しなければ、高齢者を理解することはできない
	② 高齢者の個性や多様性の理解の重要性 (25)	・ 時間的連続性の中で培ってきた、それぞれの価値観や個性を理解することが重要 ・ 全く同じ人生を歩む人はいない。特に高齢者の人生の歩み方の個性は大きい
	③ 高齢者が体験した歴史や社会を理解することの重要性 (13)	・ 高齢者の生活のあり方は、一人一人の生活史が大きく影響しているため、その人のこれまでの人生を知ることが重要 ・ 高齢者の今の姿は時代的・社会的背景と自身が生きてきた過去が反映されている
	④ 高齢者を多面的に捉えることの重要性 (9)	・ 多くの側面を持った人であるということ認識することが必要 ・ 高齢者への否定的な偏見をもちやすいが、病気になる前からではなく、元気な時の高齢者を知り、高齢者の多面的側面を理解することにより、偏見は軽減されると考えた
	⑤ 老化に関する知識と理解の重要性 (9)	・ 高齢者を尊重した看護を行うためには、老化に関する知識と理解をもち、残りの人生を楽しく過ごしてもらえよう配慮することが必要 ・ 高齢者は経験が豊富であり、知恵や洞察力などは我々より優れている
III. 高齢者看護のあり方に関する抱負 (101)	① 高齢者の価値観や個性を理解し、尊重する姿勢で関わることの重要性 (69)	・ 高齢者が生きてきた人生について理解し、尊重した上で、高齢者の看護に取り組む事が大切 ・ その人の価値観や考え方を尊重して看護することが大切
	② 家族のサポートや地域のつながりをみていくことの重要性 (10)	・ 高齢者が生活する上で、人の繋がりがいかに大切なことかを改めて理解した ・ 老後の生活における友人関係は、同じ年代の悩みを相談し合ったり、食事をしたりと老後生活をどういったものにするか最も影響を与える
	③ 生きがいをもてるような支援の重要性 (8)	・ 高齢者の趣味などを続けられる環境づくりや、運動のできる場を提供することも大事 ・ 高齢者自身が興味をもち、継続して取り組める何かを持つことが必要
	④ 高齢者の知恵を伝承し互いに学び合うことの重要性 (8)	・ 戦争時代を知る人が少なくなっているため、その当時を生きた人から直接話を聞く機会も減ってきてしまっている。そのため、この話を次の世代にも聞かせてあげることが大切である ・ 沢山の経験と知恵をもった高齢者と私達、そして子供達は今よりも多く一緒に時間を過ごし、話ができる環境が必要
	⑤ 残存機能が活かせるような働きかけの重要性 (6)	・ 看護の場でも、高齢者が自分でできることは、なるべくやらせてもらうようにすることが大切 ・ 残存機能を活かす見守るケアや、時間をかけて老化を受け入れられるようにサポートする必要がある

るような環境づくりなど<生きがいをもてるような支援の重要性>があげられた。また、高齢者の戦争時代の体験の話やこれまでの沢山の経験や知恵など<高齢者の知恵を伝承し、互いに学び合うことの重要性>があげられた。さらに、高齢者が自分でできることはなるべくやってもらうようにするなど<残存機能が活かせるような働きかけの重要性>の記載がみられた。

考 察

1. ライフヒストリー・インタビューを通しての学生の学び

カテゴリー「高齢者の理解と敬うべき対象としての実感」では、学生は祖父母の回想に耳を傾け、祖父母の知らなかった人生に触れて驚き、人生の先輩としての敬愛の気持ちが芽生え、家族としてのルーツやつながりを再確認していた。人の生い立ちから現在までの生活史や物語を聴くインタビューは、語り手と聞き手の間に生じる相互作用を通して、語り手に対する聞き手の関心はより高まる⁹⁾と報告されている。学生は、インタビューを通じて、祖父母に対してこれまで以上に親近感が高まり、高齢者はかけ離れた特別な存在ではなく、長い人生を歩んだ一人の人として捉えることができていた。

サブカテゴリーである「厳しい時代を生き抜いてきたことへの敬意」に関する記述が最も多く、現代の若者からは想像できないような当時の状況下で、高齢者が体験した事実を真摯に受け止めていた。そして、多くの事を伝えようとする高齢者に対する感謝の気持ちとともに、高齢者に興味を持ち、理解しようとする姿勢で接することの大切さを学んでいた。

カテゴリー「高齢者の人生と経験の意味を理解することの重要性」では、高齢者の人生の重みと経験の意味を受け止め、高齢者の人生観や価値形成についての理解が深まっていた。高齢者の現在は、これまで生きてきた過去の積み重ねであり、時間的連続性のなかで培われた価値観が反映されていること、高齢者一人ひとりがその人らしさという固有性と個別性を有した存在であることを理

解していた。そして、高齢者の豊かな経験によって蓄積・形成された見識や知恵、技能といったいわゆる結晶性能力²⁾に触れることで、高齢者の持つ能力や積極的な面に気づき、ステレオタイプな見方ではなく、高齢者を多面的にとらえることの重要性を学ぶことができたと考えられる。

カテゴリー「高齢者看護のあり方に関する抱負」では、上述した高齢者に対する対象理解の過程を経て、高齢者看護に関する基本的な姿勢について考察していた。高齢者の価値や個別性を理解し、尊重する姿勢は、高齢者看護の根幹である高齢者の尊厳を守ることそのものと考えられる。高齢者が生活する上で人との繋がり、すなわちソーシャル・キャピタルが充実していることの重要性や、生きがいを持つことの大切さ、さらには、高齢者の結晶性能力を次世代に継承していく必要性について言及していた。これらの気づきは、冒頭で述べた高齢者の人生への統合を支援する視点であると同時に、学習者としての学生自身の今後の学習課題であると考えられた。

2. 老年看護学教育においてライフヒストリー・インタビューを実施する意義

高齢者に対する看護の質は、看護する者が持つ高齢者イメージやエイジズムの影響を受けることが指摘されている²⁾。老年看護学実習前の高齢者のイメージに関する調査では、高齢者に対して円熟など肯定的なイメージを持ちつつも、依存など全体的にはネガティブなイメージを持つ学生が多いことが報告されている¹²⁾。本学の老年看護学原論の初回の講義に対する感想では、高齢者や老化に関して「暗い」などの否定的・嫌悪的な見方や「人の世話(厄介)になる」といった弱者としての捉え方が散見された。一般に、ネガティブなイメージを変えるには相当の量の情報が必要であり¹³⁾、意識の変化には「感動」体験の関与が大きいこと¹⁴⁾が指摘されている。一人の高齢者の生い立ちから現在までを深く知る経験は、学生の高齢者理解を促進し、高齢者観に影響を与えたものと考えられる。ライフヒストリー・インタビューを実施した結果、看護学生のエイジズムが低減し、高齢者に対するイメージが肯定的に変化したとい

う報告がある⁶⁾。今後も、病院や介護施設での臨地実習において高齢患者や要介護高齢者と接する前に、このような学習機会を設け、実習に臨ませたいと考えている。

ライフヒストリー・インタビュー実施時期については、その学習効果は科目進行の文脈に影響を受けると考えられる。多くの学生が実際に高齢者にライフヒストリー・インタビューを実施した時期は、老年看護学原論の科目が進行した後半であった。一方、老年看護学関連科目の開講に先立ち、長期休暇中の課題として実施させた報告⁸⁾もあった。本研究では、講義で教授された高齢者一般に関する学習内容を自身の祖父母の足跡や体験と合致させて理解を深めていた。さらに、高齢者看護に関する知識や理論と具体的事例を結びつけ、高齢者看護の基本姿勢について考察していた。

ライフヒストリー・インタビューで得られた学習成果の長期効果については、学習上の配慮が必要と考えられる。本学の4 Semester（2年次秋学期）の老年看護方法論では、高齢者疑似体験学習や看護過程の展開等の演習を実施している。高齢者疑似体験学習や看護過程演習、認知症高齢者等のVTR学習¹⁵⁾、老年看護学実習¹⁶⁾の前後で、高齢者のイメージがネガティブな方向に変化したという報告もある。老年看護方法論での演習や老年看護学実習では、援助が必要な高齢者が学習の主な対象となっている。このため、演習や実習によってネガティブな方向に変化する可能性は十分考えられる。加齢に対する偏った見方のまま学習が終了しないよう、高齢者アセスメントにおいて高齢者の強みに再度着目させるなど、高齢者理解に関する教育方法について検討を加える必要がある。

3. 本研究の限界と課題

本研究は一看護系大学における学生の学びであるという限界を抱えているが、老年看護学教育におけるライフヒストリー・インタビュー取り入れた学習成果を明らかにできたと考える。今後は、得られた個々の学びをグループ討議によって共有化するなど、対象理解を深める教育方法の工夫や、今回の学びが臨地実習にどのように活かされている

のかを確認していく予定である。

文 献

- 1) 総務省統計局：統計トピック No 90 統計からみた我が国の高齢者（65歳以上）2015：http://www.stat.go.jp/data/topics/topi900.htm
- 2) 小曾木加奈子，安藤邑恵：看護学生における高齢者理解—ライフヒストリーのインタビューを基にした内容分析—，教育医学，**55**(3)，283-292，2010
- 3) 畑野相子，箕原文子：高齢者の結晶性能力の受け止め方と看護学生のエイジズムおよび高齢者イメージとの関連，滋賀医科大学看護学ジャーナル，**12**(1)，35-39，2014
- 4) 吉田正子：看護学生の老人イメージに関する研究(1)，神戸市立看護短期大学紀要，**11**，55-64，1992
- 5) 小川妙子：看護学生の高齢者へのエイジズム—1年生と3年生のFAQの比較—，順天堂医療短期大学紀要，**12**，35-45，2001
- 6) Hatch, J.A.: Life history and narrative: Introduction, Hatch, J.A., Wisniewski, R., Life history and narrative, The Falmer Press, London&Washington DC, 1995, 1-4
- 7) 畑野相子，箕原文子：高齢者理解を目的としたライフインタビューの効果—エイジズムをアウトカムとした学びの分析—，滋賀医科大学看護学ジャーナル，**12**(1)，27-30，2014
- 8) 古城幸子，木下香織，馬本智恵：看護初学者の高齢者理解を深める教育方法の試み—KJ法を活用した「祖父母のライフヒストリーの語りを聴く」課題からの学び—，インターナショナル Nursing Care Research, **11**(1)，99-105，2012
- 9) 小泉美佐子，伊藤まゆみ，宮本美佐：老年看護学の対象理解にライフヒストリー・インタビューをとり入れた学習効果，老年看護学，**1**(5)，140-146，2000
- 10) 櫻井清美，尾島喜代美：ライフヒストリーインタビューを在宅高齢者に行った看護学生の思い—情意領域の学習効果—，日本看護学会論文集(地域看護)，192-195，2014
- 11) 関谷栄子：介護における人間理解を深める試み—ライフヒストリーを聞く—，地域ケアリング，**5**(6)，42-43，2003
- 12) 薬師寺文子 他：効果的な老人理解に関する看護教育方法の検討，広島県立保健福祉短期大学紀要，**4**(1)，35-45，1999
- 13) 片桐雅義：日本人のイメージ—日中大学生の比較—，宇都宮大学国際学部研究論集，**14**，1-8，2002
- 14) 戸梶亜紀彦：「感動」体験の効果について：人が変

老年看護学教育にライフヒストリー・インタビューをとりいれた学習成果

- 化するメカニズム, 広島大学マネジメント研究, 27-37, 2004
- 15) 石井知子 他: 高齢者看護の教授方法を考える, 聖マリア学院紀要, 14, 67-70, 1999
- 16) 鈴木みちえ 他: 学年進度からみた学生が抱く老年イメージの縦断的变化に関する調査, 聖隷学園浜松衛生短期大学紀要, 23, 76-85, 2000